

喜蔵堤きざうつつみ

江戸幕府は、家康の関東入国以来、武蔵国の新田開発と治水に力を注いだ。

しかし、この地方は荒川、利根川にはさまれた低地で、たびたび襲う洪水は耕地を流して不毛の地にしてしまい、農民は貧窮に陥った。

この時代の農民は、豊作と凶作は天恵によるものと信じていた。豊作の年はそれを祝って豊年踊り等で浮かれていたが、凶作となると貯えもないので直ちに貧窮してしまい労働意欲を失い路頭に迷うものが多かったようである。

名主は年貢の取りたてに苦勞した。また、飢えた人達によって、打ちこわし等の暴動も発生して幕府の政策を混乱させることもあった。

今から百八十年ほど前の天明六年から寛政三年（一七八六〜一七九三年）にかけて、当時粕壁宿の名主を勤めていた見川喜蔵みかわきざうは宿内の耕地を調査して、水害を防ぐために古利根川べり（備後村境から砂塚まで）と古隅田川沿岸の堤防（江曾堤または蝦夷堤という）を高くすることを考えた。喜蔵は、自費をもって長さ約千石の堤を古利根川べりに築き、さらに宿内を戸毎こしごとに説いて土俵を作らせ古い堤の上に積ませたので、下流の田畑は流失を免れることができた。

このことに感謝した百九十三人の農民は、連署をもって幕府にその功績について訴えた。そして、この堤を喜蔵堤と名付けた。幕府は喜蔵の善行を賞して褒賞し、終身帯刀、子孫に至るまで苗字（見川氏）を名乗ることを許した。

この喜蔵堤も江曾堤も、宅地開発によりその跡もほとんどなくなってしまった。喜蔵堤の面影は川久保地内にその起伏が見られる程度となり、江曾堤は南中曾根の見晴屋付近と増富にその名残をとどめているに過ぎない。

昭和二十二年の大水害には、この堤の上に土俵を積み重ねて洪水を防いだので、粕壁の市街地は水害を免れた実績がある。（筆者は実際に体験している）この堤の大きさは、馬踏うまぶみ五尺・法下のりした巾はば式間半から四間・高さ六尺以上であった。

見川喜蔵は文化二年（一八〇五年）十月二十九日病没　　よわい 齢六十七歳。墓は成就院にあつて、墓碑にその功績が彫まれている。

初出「広報かすかべ　昭和五十二年五月」かすかべの歴史余話